

『“やまとう”が邪馬台国だった』

たかみやしんじ

平成21年(2009年)、ユネスコ(国連教育科学文化機関)が“Atlas of the World's Languages in Danger”(消滅の危機にある世界の言語地図)を発表した。1996年、2001年に続いて3回目の発表となるので第3版とされている。

日本人はかつてハワイに移民してサトウキビ畑で生産に従事するなどハワイの発展に寄与、現在でも多くの日系ハワイ人が在住、活躍している。そのようなこともあり、日本人はハワイ旅行を好み、海外旅行先ではハワイが上位にランクされている。

ハワイと言えばアロハシャツであるが、このアロハシャツは移民した日本人が持参した着物の生地で作られた(ヨーロッパの船員たちが来ていた開襟シャツ)風に仕立てたのが始まりで、現在では式典や冠婚葬祭でも正装として認められるという。また、ひと頃はハワイ出身の大相撲力士が活躍して横綱・大関に上り詰めた関取もいた。これらの大相撲力士は、ご存じのようにハワイの先住民であった。

このハワイの先住民も、今では多くの人々が英語を使っており、いわゆるハワイ語は「極めて深刻」な危機言語に指定されている。

ユネスコの指定する消滅の危機にある言語はその危険度からランキングされており、「消滅」・「極めて深刻」・「重大な危機」・「危険」・「脆弱」と指定されている。

沖縄にはご存じの「かりゆしウェア」がある。夏の間着用される開襟シャツで、1970年に沖縄県観光連盟がハワイのアロハシャツをモチーフにして作成されたと言われる。現在ではビジネスマンや官公庁の服装として広く定着しているようである。この沖縄で使われている幾つかの言語(方言)が消滅の危機にあるらしいのである。

“Atlas of the World's Languages in Danger”(第3版)では、世界で約2,500に上る言語が消滅の危機にあるとして掲載された。日本国内では、以下の8言語が消滅の危機にあるとされている。

＊極めて深刻…アイヌ語

＊重大な危機…八重山語、与那国語

＊危険 …八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語

掲載された8言語の内、6言語が沖縄関係というのが驚きである。また、沖縄県で括れない言語の区分があり、その背景には各地が刻んできた歴史があり、当然文化の違いがあろうことも想像に難くないのである。現在、沖縄県では指摘された言語(方言)の対策に着手しているようである。

本稿では古代琉球の言語が(或いは文化・経済が)邪馬台国所在地論・卑弥呼論などとどのような関わりがあったのかなどについて検討してみたいと考えている。

序章 日本語の起源と琉球諸語

「アロハシャツ」は、ハワイから沖縄に流入して「かりゆしウェア」となった。これらの言葉やデザインが数千年変化しないことは考えにくいのであり、このような短期間で変化する可能性の高い語彙でなく、「目」とか「水」とか「川」といったどんな民族でももっているような、経年変化の可能性の低い基礎語彙によって適切な言語比較ができるのだという。

また、言語については語彙だけでなく、基本的な文章構成の差異にも留意を要するとされる。即ち、英語で、“I read a book.”は日本語では、“私は本を読む。”となる。また、中国語の文章構成は英語と同様とされている。他の民族語も概ねどちらかに類型されるようである。

以上のようなことを前提として日本語とアジア諸言語との類縁関係が分析され、日本語の起源論が諸説展開されているのであるが、概ね以下のような主張が大勢ではないかと思われる。

- ① 縄文時代に、ユーラシア大陸の北方から流入した言語に、インドネシア系言語・カンボジア系言語が流入した。その言語の混合の度合いにより、原琉球語、原日本語、原アイヌ語が形成されていった。
- ② 縄文時代晩期から弥生時代早期(紀元前1000年～紀元前後)、朝鮮半島南部や中国江南地域から北九州などに土着した人々がいた。彼らの使う言語が原琉球語、原日本語、原アイヌ語に影響していった。
- ③ 特に北九州地区においては、稲作の発展などにより人口増加がみられ、次第に集落が形成され、やがて王国に発展していった。これらの人々は、北九州から南九州・琉球へ、また列島へと勢力を拡大していった。彼らの使う言語が、原琉球語、原日本語、原アイヌ語に影響を与えていった。
- ④ その後、中国王朝との関係が深まるなかで、中国語(文化的語彙)の流入があり現在の日本語に影響を与えてきた。

NET に「日本語と琉球諸語のルーツ」(国立国語研究所・ことば研究館の広報誌＜ことばの波止場～Vol 13-1・2023/11～＞)が掲載されている。トマ・ペラール氏(フランス国立科学研究センター・研究員)と五十嵐陽介氏(国立国語研究所・教授)の対談集である。対談の内容を要約すると以下のとおりである。

- ① 日本語と琉球諸語は同じ起源をもっている同系の言語である。日本語と琉球諸語の共通祖先の言語を「日琉祖語」という。
- ② 「日琉祖語」の話者は弥生時代から日本列島に移住し、弥生文化の担い手となった。東北アジア、中国北部、朝鮮半島あたりから来たと考えられる。
- ③ 日本語と「琉球祖語」の分岐は奈良時代以前、稲作が伝わった弥生時代(前10世紀～後3世紀まで)以降と考えるのが自然である。(ペラール氏としては)弥生

時代末期から古墳時代あたりと考えている。

- ④「琉球祖語」の話者が琉球列島へ移住したのは9～11世紀頃。「琉球祖語」の話者は暫く九州で暮らし、中国からの漢語を借用して後琉球列島に移住した。そして、グスク文化の担い手となったと考えられる。

いかがであろうか。上段の日本語の起源の一般論では、北方人基層説と南方人基層説が融合されるなかに、中国江南地区から北九州に土着した人々が使う言語が影響を与えていったという。言わば「流入論」ということになろうかと考えられる。

＊北方人基層説について…日本に最初にやってきた人々はユーラシア大陸北方の人々で縄文人に繋がる。彼らは「アルタイ諸言語」の祖語を使う人々で、現在の日本語の語順はこれによる。

＊南方人基層説について…「マライ・ポリネシア語族」の祖先の人々が日本列島にやってきたと考えられる。中国南部からわたってきた可能性も大きい。彼らが縄文人・アイヌ人の祖先である。

一方、下段の琉球諸語のルーツ論では、東北アジア・中国北部・朝鮮半島あたりから来た人々が「日琉祖語」を形成し、弥生時代以降に日本語と琉球祖語に分岐して行ったという。言わば、ラテン語が羅語・伊語・仏語・西語・葡語に変化していったような「系統論」ということになろうかと考えられる。いずれにしても、こうした日本語の或いは琉球諸語の起源論はまだ統一されるには至っていないという現状が認識されるのではないだろうか。

そこで、この日本語の起源論にもう少し深入りするために、安本美典氏の諸言語の比較分析を参照させていただく。それは、「邪馬台国の会」第261回講演会「日本語に近い諸言語」(2007年9月開催)の講演録などに記載されているものだ。

安本美典氏は、上古日本語200語彙(奈良時代)と各種言語を統計学の手法により科学的に比較、分析されている。分析結果によると、上古日本語200語と東京方言との一致数は157語、首里方言(沖縄島)との一致数は121語であった。また、インドネシア語との一致数は57語、カンボジア語との一致数が57語であったという。中期朝鮮語の一致数53語、北京方言は一致数50で、各々一致が偶然によって得られる確率が1%未満であり、統計学上の基準では有意であるとされている。

注目すべきは、東京方言と首里方言の一致数であろう。これらの数値は明らかに上古日本語と東京方言・首里方言との何らかの相関関係を示していると考えられるのである。そして、上古日本語が奈良時代に使われていた日本語であろうことから、平城京その後の平安京と続く皇統譜の連続性と東国への覇権拡大などに鑑みて、東京方言の一致性の高さについては特段異存を挟む余地はないのだろう。

しかしながら、検討すべきは首里方言との一致性についてである。何故に、上古日本語と首里方言は高い一致性を示したのか。弥生時代から北九州地区に芽生えた

九州王朝の覇権、奈良時代の大和王朝の覇権が沖縄に及んだという事績が余り見えず、言語形成に影響を与えるようなレベルのものはないとされている。考えられるのは、稲作の伝播だと一般に言われているのであるが、これについても沖縄の貝塚時代(紀元前4000年から紀元10世紀)には稲作の痕跡(遺跡など)が余り見られず、稲作の痕跡が残されるのはグスク時代(紀元11世紀から16世紀)以降という。

では、一体首里方言をもたらしたのは何時で誰かということである。この問題を解決しなくては琉球語の起源論の決着がつかないのである。ここで、思い出さないとならないのは、上古日本語200語彙がどのように抽出されたかということである。それは社会変動や時間経過などによって影響を受けにくい基本的な語彙が選ばれたということであろう。どういうことか。俗っぽく表現するならば、少なくとも3000年くらいは変わらずに琉球で喋られていた身近な言葉ということなのである。

では、それらの基本的な語彙はどのようにして形成されたのであろうか。誰が琉球にもたらしたのだろうか。

本欄の小稿「徐福渡来はやはり真実だった」(2024年7月掲載)において南方からの縄文人の日本列島への渡来を復元、記述している部分があるので要点を以下に参照してみたい。

- ① 4万年前から2万年前にアフリカから流れてきて東南アジア一帯に定着し、いわゆる「ホアビニアン文化」を築いた人たちがいた。約8000年前の「ホアビニアン」の人骨を DNA 解析したところ古代東南アジア系に近いことが確認された。それはまた、日本の縄文人のそれと近いというのである。また、ベトナム系や南中国系、中国(北京)系やモンゴル系とは異なっているというのである。
- ② この「ホアビニアン文化」を築いた人たちは、農耕民族に追われてその土地を離れていった。一部の集団が中国大陆の沿岸を北上して日本列島に行き着いたのではないかと推論されている。また、一部の人たちはインドネシアなど島々に拡散していったのではないかと考えられる。
- ③ これらのインドネシアなど東南アジアの島々に拡散していった人たちの一部が丸木舟に乗って島つたいに北上して琉球諸島に、そして日本列島に進んで行ったのではないかと考えられる。
- ④ タイ国パッタラン地方の密林に暮らしている「マニ族」は、上記「ホアビニアン文化」を築いた人たちの流れをくんでいるという。この「マニ族」の人たちは、小柄であり、髪は縮れていて肌の色は濃いのだという。現在の沖縄県の一部の人たちにそのような特徴がみられる。

これらのことから、小稿では日本列島に渡来した古代東南アジアの人たちが縄文人の形成に大きく影響したのではないかと記述したのである。そして、古代東南アジアの人たちの話していた言語は、貝塚時代の琉球列島の言語に、日本列島の縄文人の言語に大きく影響したものと考えられるのである。

第1章 “やまとう”を考える

沖縄に“やまとう”という言葉がある。「Wiktionary 日本語版」によれば、沖縄語の名詞であり、1. 日本、日本本土 2. 薩摩 を意味するという。関連語で、“やまとうんちゅ”があるが、1. 日本人、2. 薩摩人を意味するという。また、“うふやまとうんちゅ”という言葉もあるが、これは日本人を意味するという。

沖縄語と一口でいってもその使う人の範囲や何時の時代からのことかなど考え始めるとたちまち霧の中に入ってしまう。例えば、奄美大島や与論島は鹿児島なのか沖縄なのか。それは何時、どのような理由で決められたのか、決められた線引きは使われている言語や行われている風習などと合っているのかというようなことがなかなか判然としないのである。

NET に「琉球諸語の継承について」(琉球大学名誉教授:宮良信詳)という小論文が掲載されている。上記の疑問の解決の糸口になるかもしれないので要点を以下に記述させていただく。(但し、語彙の分析は省略)

- ① 琉球諸語は、北から奄美語(あまみぐち)、国頭語(くんちゃんぐち)、沖縄語(うちなーぐち)、宮古語(みやーくふつ)、八重山語(やいまむに)、与那国語(どうなんむぬい)の6言語とされる。
- ② 現在の沖縄語における“やまとう”(日本、他府県)、“やまとうぐち”(日本語)、“やまとうんちゅ”(日本人、他府県人)は、奈良時代の“大和”の呼び名を反映していると考えられる。
- ③ 奈良時代における中国の呼び名は“唐”(618年～907年)であるが、現代の沖縄語でも当時を反映した“とー”(中国)、“とーぬぐち”(中国語)、“とーんちゅ”(中国人)という呼び名がいまだに遺われている。1429年に成立した琉球王国は、明や清との国交が盛んであったが中国を“とー”とする呼び名が変わることがなかった。
- ④ 琉球諸語における“やまとう”や、“とー”が奈良時代(710年～784年)の呼び名を反映していることから、8世紀か、或いはそれ以前には、既に琉球列島には人々が住んでいて固有の言語を話していたと考えられる。
- ⑤ 沖縄語では、自分たちは“うちなーんちゅ”(沖縄の人)、他府県の人たちは“やまとうんちゅ”(大和の人)として区別する。日本語は“やまとうぐち”、と呼び、自分たちの言葉は“うちなーぐち”として区別する。
- ⑥ “やまとう”と、“うちなー”は全く相反する概念である。その“やまとう”とは、元来、奈良時代やそれ以前の「日本」を表わす言葉であり、“うちなーんちゅ”は、日本人ではあっても、“やまとうんちゅ”ではないのである。
- ⑦ 八重山語においても同様に、日本語は“やまとうむに”、八重山語は“やいまむに”と区別している。そして、自分たちは“やいまぶいとう”、(八重山の人)、他府県の人たちは“やまとうぶいとう”(大和の人)として区別する。

宮良教授の論文の中で本稿として注目したいのは、一つは奈良時代に“やまとう”や、“とー”が琉球列島に浸透していたらしいということである。とすれば、この時代に和琉唐の三国が何らかの強い交流があったのではないかと推量させられるのである。また、“やまとう”は、元来、奈良時代やそれ以前の日本を表わす言葉であったと示唆されている点である。そこで、本稿ではそれらの点について少し掘り下げてみたい。

(1) 奈良時代の和・琉・唐

奈良時代は前述のように平城京に遷都された710年から長岡京に遷都された784年か、平安京に遷都された794年をいう。この時代に相当する琉球は貝塚時代・後期(前500年から10世紀)ということになるだろう。

奈良時代は、律令制のもと天皇を中心として中央官制、税制、地方行政組織が出来上がっていった時代であった。日本列島は道制により管理された。遠隔地の九州地方北部には大宰府が置かれ、東北地方には多賀城、出羽柵などが設置された。しかしながら、九州南部は古くは熊襲、7世紀後半頃からは隼人と呼ばれ、徐々に大和政権の影響が浸透してはいたが大宝律令(701年)が施行された時点でも律令制支配が及ばない地方だった。奈良時代における隼人は朝貢の対象であり、大隅・薩摩の両国に班田が行われたのは平安時代に入ってからという。(Wikipedia)

現在の南西諸島からも7世紀の前半から大和政権に朝貢するようになっていた。698年、覓国使(べっこくし:南西諸島調査隊)が派遣され、種子島・屋久島・奄美大島・徳之島が朝貢に訪れ、702年には行政組織として多禰国(種子島・屋久島・口永良部島)が設置された。9世紀になると「国なくして敵なく、損ありて益なし」と言われたように律令国家の関心は薄くなっていった。(同上)

貝塚時代の日・琉の交流は、政治よりも経済交流のほうに注目すべきではないかと考えられる。特に貝製品が珍重され、イモガイが馬具などに装飾されたり、ブレスレットとして使われたりした。ヤコウガイは匙や杯に使われたという。特に平安時代の儀式書には螺杯が石清水の祭に使われた記録があるという。奄美大島にはヤコウガイが大量に出土する遺跡が発掘されており、工房的な大型遺跡ではないかと言われているという。これらの貝製品は、静岡県や長野県の古墳から出土、また、北海道の有珠モシリの遺跡からも出土しているという。(第29回北大人文学カフェ「交易品がつかないだ、アイヌと琉球-古代東アジアの海のネットワーク」より)

貝塚時代の琉・唐の交流も盛んだったようである。沖縄にもヤコウガイが大量に出土する遺跡が発掘されており、中国との交流が指摘されている。というのも、戦国時代の燕国の明刀銭、新の王莽の時代の五銖銭、唐代の開元通宝が南西諸島や琉球国から出土することが確認されているからである。また、時代は下るが、薩摩硫黄島は東アジア屈指の硫黄の産地で、この硫黄が10世紀以降中国に輸出されていたことが確認されており近年注目されているという。(同上)

さて、日・唐の交流であるが、これはなんと言っても「遣唐使」の派遣ということになる。618年、隋が滅んで唐が建った。この唐の時代が907年まで続く。遣唐使は、舒明天皇2年(630年)に始まり最終は承和5年(838年)約200年間に十数回派遣されたという。奈良時代(710年～784年)はすっぽりこの中に入っていることになる。

この遣唐使、どのようなルートで唐の都(長安)まで往復していたのだろうか。記録によれば、朝鮮半島経由で山東半島へ至る北路、五島列島から東シナ海を横断する南路と琉球列島経由で東シナ海を横断する南島路で行っていたようである。遭難・漂流の記録が多々残されているので想像以上の難行であったと思われる。このような難行を乗り越えるには相当な海運技術者の集団でないと無理であったろうと考えられる。そのように考えるならば、少なくとも南のルートについては琉球の船乗りたちがその海運技術者に指名され大いに活躍したであろうことが考えられる。

(2)“とー”を考える

ところで、琉球の貝塚時代(後期)は、先に記述のように紀元前500年から紀元10世紀くらいとされているのだが、これは弥生時代から古墳時代そして奈良時代がすっぽり入るような時代でもあることになる。そして、中国を意味する“とー”という語彙はその奈良時代に形成されたようなのである。しかしながら、中国には唐の時代以前にも多くの王朝があった。そして、唐の時代以降にも多くの王朝があった。それにもかかわらず、何故唐の時代の呼称が残されているのだろうか。

先ず考えなくてはならないのは、その“とー”という中国を表わす呼称は王朝を指しているのではなく、また、国名を指している訳でもないということである。それは、ユーラシア大陸にある中国という【地域】を言っているということなのであろう。従って、王朝によって中国の領域は変動するのであるが、唐の時代の中国の領域をして“とー”と呼び始めて、以降、中国という【地域】を“とー”と呼んだということなのだろう。

琉球には唐の時代以前にも人々は暮らしており、言葉も交わしていた。また、唐の時代以前の中国の王朝との交流はあった。従って、その時々で中国を指す語彙はあったものと考えられる。しかしながら、それらの推測される呼称は定着しなかった。何故か。それは、いわゆる政治体制や文化などで変化する語彙であり、基本的語彙ではなかったからである。

では次に、基本的語彙ではない範疇の“とー”という語彙が唐の滅んだ(907年)以降1000年以上も何故使われているのかという疑問に答えなくてはならない。その答えは、“とー”が基本的語彙化したのだということになる。琉球の船乗りさんたちの次のような会話が聞こえてこないだろうか。

船乗りの妻 「こんど、どこに行くワケ」

船乗り 「“とー”サア」

基本的語彙でない語彙が基本的語彙化するということであるが、そのためにはその語彙が形成されるにあたり、相当なインパクトと広範な認知がなければならないのだろう。それは、和～琉、琉～唐、唐～和の間柄において相互を結ぶ強い関係があったということになる。それが遣唐使の派遣とその受容ということになるのであろう。

上記の相当なインパクトと広範な認知ということであるが、琉球では“とー”という語彙が遺されていて使われてもいるので説明を要しないのであるが、日本列島ではいかがであろうか。

「唐人屋敷」という施設があった。江戸時代の鎖国政策の中であって、現在の長崎市館内町に設置された中国人に認められた居住区のことをいうのである。広さは約9400坪、2000人程度の収容能力を有していたという。同じく長崎の「出島」のオランダ人が厳重に監視されたのに比べ、こちらの中国人は比較的自由に出入りが許されたという。

図1 唐人屋敷(長崎市まちなか事業推進室より)や



「唐人お吉」という物語がある。斎藤きちは、幕末に初代アメリカ総領事 T.ハリスに雇用された伊豆国下田の日本人女性である。開国後、外国人にかしづいた日本人女性として喧伝され、後年小説などで「唐人お吉」の異名で呼ばれた。T.ハリスは当時体調を崩しており看護人を要求したのかもしれない。しかし、妾を要求されたと解した下田奉行所はきちを妾として派遣した。しかしながら、きちには体に腫物があり三日で返されてしまうことに…。

「唐人屋敷」の時代の中国は清の時代である。清の時代に作った中国人向けの居住区が何故「唐人屋敷」なのか。それは、唐人＝中国人(＝中国地域の人)ということが江戸時代においても認知されていたという証左でもあるということであろう。

では、「唐人お吉」はどうか。この場合は、唐人＝外国人(＝中国地域の人)として著されているようである。しかしながら、斎藤きちは日本人だった。妾にされた上に外国人にもされてしまった哀れなお吉。昭和初期という時代背景があり、唐人という語彙は蔑みの意味も込められたようである。

(3) “やまとう”を考える

琉球語で“やまとう”と喋られてきた元々の言語は何か。それは、“ヤマト”が元になっていると考えられる。では、その“ヤマト”は何時、どこで形成され、そして一般化した言語なのか。まずはそれらのことから解明していかななくてはならないだろう。

元々はヤマト王権の本拠地である奈良盆地の東南地区が大和(やまと)と呼称されていた。記紀などでは神武天皇の時代に椎根津彦を初代として倭国造が設置された

と伝わる。その後、ヤマト王権が奈良盆地一帯を支配するようになるとその地域も大和とよばれるようになる。そして、律令時代には奈良盆地周辺を令制国として大和国とした。さらに、ヤマト王権の支配が日本列島の大半（東北地方南部から九州南部）にまで及ぶに至り、それらを総称して大和（やまと）と呼ばれるようになった。こうして、日本列島、即ち、日本国の別名として大和（やまと）が使用されるようになった。（Wikipedia）

琉球列島の人たちが日本国を“やまとう”と呼称する、その元が倭国造であったり、令制大和国であったりするとは考えられない。やはり、ヤマト王権が日本列島の大半を掌握した段階の大和（やまと）でなくてはならないだろう。従って、“とー”と同じくここでも奈良時代に呼称された大和（やまと）だったと考えるのが妥当なのであろう。

問題は、琉球列島のどのような人たちが大和国を“やまとう”と呼称する必要があったかということを考えなくてはならないということである。

先述のように、琉球列島から大和には貝が運ばれていた。その流通ルートは貝の道と言われるほどであった。貝の道といっても南西諸島から日本列島各地に運ばれるのであるから地上の道ではなく海上の道であった。船に積んで船乗りが漕いだりして運んだのだろう。そして、貝を運んだ帰路においては大和の精巧な土器などを運んだのであった。こうした経済交流に関係する人たちが“やまとう”という地域名を必要としていたのであろう。そして、大和のことを“やまとう”と喋っていた。但し、それでは広域に過ぎるのでそれに続けて令制国名が付属されていた…。

しかしながら時代をもう少し遡らせると、先述のように東南アジアの島々から丸木舟に乗って島つたいに北上して琉球諸島に渡来し、そして更に日本列島へと進んで行き、先ずは九州に土着した人たちがいたのである。この人たちは行き先のことを何と言っていたのだろうか。その時代の日本のことを著す漢籍では、概ね九州或いは九州と朝鮮半島との海峡あたりのことを倭（わ）、倭人（わじん）、倭国（わこく）などと記していた。『魏志倭人伝』においても倭人、倭国であった。九州と海を隔てて東にある国も認識されていたようであるがそれは倭種と記述された。

では、その頃の琉球列島の人たちは九州を目指すのに“倭”に渡ると言ったのであろうか。自分たちが目指す土地を蔑んだように“倭”というだろうか。また、この“倭”という地域は広域に過ぎるように思われるのである。

その質問の答の鍵を握るのが『魏志倭人伝』の“邪馬台国”という国名ではないだろうか。ヤマト国或いはヤマタイ国と訓じたのであろう。『魏志倭人伝』では概ね九州島を中心として界隈の島々を倭人或いは倭国としていたようである。そして、上記の邪馬台国の所在を初めて記述したのも『魏志倭人伝』だった。後の（432年）『後漢書』に“邪馬台国”の記述があるが、陳寿が『魏志倭人伝』を著したと思われる290年前後には“邪馬台国”が認識されていたと考えてよさそうである。そしてそれは、北部九州の南部あたりか南部九州とする九州説が有力であろう。（所在地論は後述予定）

この“邪馬台国”、何故ヤマト(ヤマタイ)なのかが解明されていない。しかしながら、中国人が倭・倭人・倭国と呼称したのと同じように、先述の琉球の人たちが目指してきて土着した九州島の呼称がヤマト(ヤマタイ)であったと考えて大きくは外していないだろう。

琉球の人たちは、縄文時代から断続的に九州島を目指して北へ進んできた。さらに一部の人たちは日本列島へと進んでいった。その人たちが九州島を“やまとう”と呼んでいた。目的地として“やまとう”と呼ぶ必要があったのである。

しかしながら、弥生時代に入ると次第に北九州方面には大型集落が形成され、やがて国ができ、国の名前がつけられるようになった。それらの人たちは中国江南や朝鮮半島から渡来した人たちだった。その結果、琉球から九州島への渡来は南九州方面中心となっていった。そして、“やまとう”という呼称も次第に南九州を意味するように変化していったのである。

第2章 新たな所在地論

(1) 邪馬台国

『魏志倭人伝』では、“北九州地区の国々が戦乱で乱れた時、九州の南の方に卑弥呼という女王がいた。国々では、この卑弥呼を女王に共立した。卑弥呼は鬼道に事え人々をよく惑わした”と記述される。そして、その国は“邪馬台国”というのだが、それは、帯方郡の代表が参問した時に伊都国の官から聞いた答えであった。

帯方郡の代表 「それで、その卑弥呼はどこにいるのかね」

伊都国の官 「はい、“やまとう”の方におります」

「ここら辺から、南の方に船で20日行くと投馬国が在り、そこから、また、船で10日、歩いて1月行ったところにおります」

邪馬台国の所在地論は、大きくは畿内説と九州説そしてその他の説となっているのだが、確定的なものがないため定説にはなかなか落ち着かない状況である。

上記の会話のなかの“やまとう”が奈良盆地の東南の大和(やまと)なら畿内説で決まりということなのだが、今まで記述してきたように“やまとう”はそんなに単純な語彙ではなかったのである。本稿では九州説を軸に論じてみたい。

先述のように、『漢書』『後漢書』などでは、紀元前1世紀頃から紀元3世紀頃の日本に国々が形成されるようになり、それを倭・倭人・倭国と記述した。これに対して日本では何も残されているものがないので自分たちの国をどのように呼称したのか不明である。しかしながら、既述のように琉球人が“やまとう”と呼称していたのではないかということが推量されるのである。

そして、“やまとう”の呼称する範囲は時代と共に変化していった。紀元前後頃までは九州島を意味していた。その後それは、九州島の北部に国々が興るに伴い九州島

の南部を意味するようになった。そして、律令時代には日本列島の大半を意味するようになったのである。

さて、以上のことから“邪馬台国”は九州南部に所在するのではないかということになってきたのであるが、一般的には“邪馬台国”北九州説のほうが大勢であると思われる。

北九州説の論拠は、帯方郡から邪馬台国までの総距離(12,000里)に対して伊都国までに10,500里かかっているので残り1,500里程度であり、概ね北部九州地区が範囲である。以上のことから、北九州説のなかでも邪馬台国を福岡県内とする説が多いように見受けられる。しかしながら、福岡県で発掘されている弥生時代遺跡は福岡市を中心に春日市・大野城市・宗像市・福津市・古賀市・糸島市・太宰府市・朝倉市・筑紫野市・嘉麻市・那珂川町・糟屋郡・遠賀郡など多数を数える。これらは、糸島市(伊都国)や福岡市(奴国)から40～50Km 内にあるのだろう。それらの集落や国々で交流がなかったとは考えにくいのではないだろうか。とすれば、交流の道があった。ということは、邪馬台国が福岡県にあったなら、そこには歩いて行けたのである。何故船で何日もかけて行かないとならないのか疑問ではないだろうか。また、帯方郡使は邪馬台国に行かなかったと考えられるのであるが、歩いて行かれるような所に何故行かなかったのであろうか。

この交流の道であるが、平時は交流の道として機能して大いに人や物資が行きかいたのであろう。しかしながら、一度戦乱になるとそれは軍隊の行軍の道と化した。従って、界隈を繋ぐ道がなければ、“倭国大乱”もさして大きな乱にはならなかったと考えられるのである。

また、“狗奴国”を熊本県(球磨郡など)に比定する説が有力である。この説に基づけば、邪馬台国はその北方向であり、邪馬台国＝福岡県説を支持する。しかしながら、この“狗奴国”、『後漢書』では女王国の東、海を度って千餘里に在ると記述される。とすれば、邪馬台国＝福岡県説を支持しないことになるのだが…。細部検討は、次の(2)項で行うので暫くお待ちいただきたい。

次に、伊都国に設置されたと記述される一大率のことである。女王宛ての文書や贈り物をチェックして女王のもとへ運んだというのであるが、邪馬台国が遠隔地ではそのようなことができたのか疑わしい。また、女王卑弥呼が遠隔地に居て、鬼道を用いてどのようにして衆を惑わすことができるのかという問題もある。これらについては、第3章にて論ずる予定のため、順次そちらまで読み進めていただきたい。

(2) 狗奴国

狗奴国について、『魏志倭人伝』では“其の南に狗奴国あり、男子を王となす。其の官に狗古智卑狗あり。女王に属さず”と記述される。『後漢書』では、“女王国より東、海を度ること千餘里にして 拘奴国に至り、皆倭種といえども、而も女王国に属せず”である。

『後漢書』は宋代(432年)に范曄が撰したとされ、『魏志倭人伝』を真似ているとも言われる。しかしながら、『魏志倭人伝』は、陳寿が290年頃著した『三国志』の東夷伝のなかで記述されたものである。ところが、陳寿の死後多くの新しい資料が発見されたことで裴松之が数倍の分量で補注、宋代(429年)に『三国志』として成ったが、これも散逸してしまった。現在伝わる刻本は南宋時代(1127年～1279年)のもので、『紹興本』、『紹熙本』と言われるものが残る。

その後、『魏志倭人伝』では景初2年6月に魏の都に詣り朝貢したこと、倭の女王卑弥呼は、狗奴国の男王卑弥弓呼と前から仲が悪いことなどが記されるが、これらは、後漢時代の範囲外のため『後漢書』には記されない。

陳寿『三国志』に狗奴国のことがどのように記述されていたかは分からない。范曄『後漢書』の狗奴国の記述が正しいのか、『紹興本』や『紹熙本』の狗奴国の記述が正しいのかも分からない。従って、狗奴国がどこに在ったのかということは、別の角度から検討しなくてはならない。

鳥越憲三郎氏が『倭人・倭国伝全釈』(角川文庫)において、『三国志』の解説のなかで狗奴国の男王について言及しているくだりがある。“狗奴国の男王は邪馬台国で女王を補佐する政治権・軍事権を持つ男王ではなく、邪馬台国の女王と同じ祭事権者、即ち、第一次主権者であった。“卑弥呼と狗奴国男王、素より和せず”とは、両国の仲の悪さを最高主権者の名で示したに過ぎない”と。

鳥越氏がこのように主張されているのは、“わが国古代は邪馬台国のように、第一次主権者としての祭事権を持つ姉(または妹)の王と、第二次主権者としての政治権・軍事権を司る弟(または兄)の王、すなわち二王による祭政二重主権の形態だった。それが、祭事権者としての長男と、政治権・軍事権者としての次男との組み合わせに移行する。『日本書記』によると、葛城王朝は男王二人による統治形態であったことを示している”ということのようなのである。

狗奴国の男王が鳥越氏の主張されているような第一次主権者であったのか、あるいは、祭政兼務の男王だったのかは不明であろう。わが国古代には邪馬台国のような祭事権者たる女王がいて、政治・軍事権を司る男王がいる祭政二重主権の形態がとられていた国々は確かにあった。しかしながら、すべての国がそのような統治形態から始まったとは言い切れないのかもしれない。

いずれにしても、もし狗奴国が現在の熊本県だとしたら、それは縄文時代にどのような人たちが渡来してきた地域だったのかを考える必要がある。それは既に何度も既述するように、琉球からの渡来の人たちが主流であったのだろう。とすれば、九州各地に渡来した同じ琉球の人たちは同じ宗教観をもっていたはずである。それは、巫女女王が祭祀・呪術を担当し、兄弟が政治・軍事を担当することなのである。

そのように考えると、(女王に属さない)狗奴国は九州各地とは相いれない宗教観を有しているのであり、狗奴国＝熊本県説は支持されないことになるのである。

もう一つ、熊本県は弥生時代に鉄の生産が盛んであったことを検討しなければならない。まずは、表1＜弥生時代後期の鉄器出土数＞と、表2＜弥生時代中期の鉄器出土数＞をじっくりご覧いただきたい。

＜弥生時代後期の鉄器出土数＞ (表1)

		刀剣	鏃	工具	伐採	農具
福岡県	集落	34	282	304	188	236
	墓	49	106	196	25	22
	計	83	388	500	213	258
熊本県	集落	13	373	186	45	157
	墓	4	4	3		1
	計	17	377	189	45	158

		他	小計	不明	総数	遺跡数(弥生時代)
福岡県	集落	50	1,094	232	1,326	—
	墓	11	409	11	420	—
	計	61	1,503	243	1,746	3,033
熊本県	集落	37	811	1,066	1,877	—
	墓		12	2	14	—
	計	37	823	1,068	1,891	903

* 藤田憲司「見えざる鉄器」～究班Ⅱ～2002年9月より

* 遺跡数:文化庁参考資料(平成24年度周知の埋蔵文化財包蔵地数)

狗奴国＝熊本県説の論拠の一つに鉄器の出土の多さがある。確かに表1のように弥生時代後期の鉄器出土数は、総数では福岡県を上回り、府県別鉄器出土数は全国1位と言われている。しかしながら、農・工具などや用途不明のものを除くと目立っているのは殆どが鉄鏃である。藤田憲司氏によると、この鉄鏃などの発掘状況について次のように記述されている。“熊本県方保田東原遺跡(山鹿市)や西弥護免遺跡(大津町)、池田・古藺遺跡(阿蘇市)では多量の鉄器が出土しているが、竪穴建物ごとに鉄鏃と、刀子や鉋あるいは鎌が1・2点ずつ出土している。…前方後円墳時代の墳墓における大量副葬には鉄器の一括管理の様相を認めうるが、弥生時代後期の鉄器の在り方は個別の最小単位で鉄器を分けもっている姿であり、弥生時代の集団内における鉄器管理形態を示している”と。

例えば、山鹿と阿蘇と大津が大連合して北九州に攻めていくというようなことがあったのだろうか。福岡県と熊本県の遺跡数から考えても、そのようなことは考えられないのである。総合力でとても敵対するような相手ではない。とすれば、山鹿や阿蘇、大津の集落(各竪穴住居)に格納されていた鉄鏃は専ら自分たちの集落の防御用のものであったと考えた方が適当なのではないだろうか。

また、集落出土と墓出土に注目すると、熊本県では殆ど墓出土(副葬)がないのである。このことの意味するのは、弥生時代後期段階では熊本県においてはまだ集落程度の集合体であり、国と言われる規模の集合体は極めて少なかったということではないだろうか。とすれば極く自然に、各地集落が連合して北九州に敵対することができなかったのではないかと考えざるを得なくなるのである。即ち、狗奴国＝熊本県説は支持されないということにならざるを得ないのである。

<弥生時代中期の鉄器出土数>

(表2)

		刀剣	鏃	工具	伐採	農具
福岡県	集落	3	24	35	95	14
	墓	36	14	18	5	
	計	39	38	53	100	14
熊本県	集落				6	
	墓				1	
	計				7	

		他	小計	不明	総数	備考
福岡県	集落	14	185	100	285	
	墓	27	100	6	106	
	計	41	285	106	391	
熊本県	集落		6	11	17	
	墓		1		1	
	計		7	11	18	

* 藤田憲司「見えざる鉄器」～究班Ⅱ～2002年9月より

弥生時代中期(紀元前1世紀頃から紀元1世紀初期頃)の鉄器出土数(表2)をみると、熊本県には鉄器の出土が殆どない。表2だけでは分からないが、この時期福岡県が鉄器出土数日本一であった。そして、弥生時代後期(紀元1世紀中頃から紀元3世紀)には熊本県が日本一の鉄器出土となる。しかしながら、遺跡数が示すように人口はそれほど増加しなかった。それは火山灰地など稲作適地が左程多くなかったことによるのであろう。この頃九州北部で始まった稲作は、耕作地を求めて九州南部へそして列島各地へと進んでいった。これが所謂稲作の伝播ということなのであろう。稲作の拡大は同時に鉄器の需要を高め、鉄材を求める進出も行われたようである。

これらのことの意味するのは、福岡県から熊本県への進出は稲作拡大のためでなく、鉄器増産のため鉄器製造や製鉄の工人が熊本県に移っていったことを示しているのではないだろうか。すなわち、熊本県は福岡県への鉄器の供給の役割を担っていた。そのような見方をするならば、熊本県と福岡県とが相攻撃するような図は描きにくい

のであり、狗奴国＝熊本県説はますます遠のいて行かざるを得ないのではないだろうか。

では、狗奴国はどこに在ったのかということであるが、基本的には『後漢書』の記述するところに直に従えばよいということになってきた。『後漢書』では、“女王国より東、海を度ること千餘里にして 拘奴国に至り、皆倭種といえども、而も女王国に属せず”である。「九州島から東方向に海を渡ったところにある、別の宗教観の大国が狗奴国である」と定義づけられる。しかしながら、紙面の都合があり詳細は別稿に譲りたい。

第3章 卑弥呼を考える

20,000年前頃日本列島は、北海道北部と九州北西部で大陸と繋がっていたのではないかと考えられている。そして、日本列島は16,000年前から6,000年前にかけての海面上昇により次第に大陸から孤立していった。この立地上の特色から日本では独特の縄文時代が形成されたのだった。16,000年前から3,000年前が縄文時代と言われている。

この日本が大陸と繋がっている頃、ユーラシア大陸北方から流入した人たち、そして「ホアビニアン文化」を築いた東南アジアの人たちが中国沿岸部を北上して日本に流入した。この人たちが縄文人を形成したのではないかとされているのである。

しかしながら、7,300年前に歴史を大きく揺るがした「鬼界カルデラ大噴火」が発生する。その火砕流は鹿児島県南部に到達したとされ、また、火山灰は九州全域を覆い、20cm から30cm堆積したのだという。この火山灰の堆積レベルは縄文時代の九州島の動植物や海資源に（そして縄文人に）壊滅的な影響を及ぼしたとされている。そして、その復活には数百年を要したのだとされている。



図2 鬼界カルデラ(イメージ図)や

そのようなことから考えると、その後の九州島の縄文人というのは、その後に朝鮮半島や琉球から流入してきた人たちが主流とされなくてはならないだろう。とりわけ、序章で記述した東南アジアの島々に追われた「ホアビニアン文化」を築いた人たちの流入に注目したいところである。

(1) 記紀の証言

『日本書紀』の記述では、神功皇后は仲哀2年(193年)に仲哀天皇の後になっている。仲哀8年(199年)には香椎の宮(福岡県福岡市)に居られた。そして仲哀9年(200年)に仲哀天皇がご逝去され、その後、神功皇后により新羅征討がなされた。そして、神功69年(269年)に神功皇后が逝去される。

仲哀2年(193年から神功69年(269年)の間、明帝景初3年(239年)倭の女王、

大夫難斗米を帶方郡に遣わし、洛陽に至る(魏志)。正始元年(240年)梯携らを遣わせて詔書・印綬を倭国へ行かせる(魏志)。正始4年(243年)倭王、大夫掖耶ら8人を遣わせ献上品を届けさせる(魏志)。晋・武帝泰初2年(266年)倭の女王、通訳を重ねて貢献した(起居注)。…といったことが引用され、『日本書紀』に記述されているのである。

この『魏志倭人伝』や『(晋の)起居注』から引用されている内容は、まさしく記紀が編纂されていた頃その写本を編纂者たちが読むことができたことを示している。また、他の漢籍をも十分に読むことができたであろうことが類推される。

その時代は邪馬台国の卑弥呼の時代である。その時代を神功皇后の時代に重ねているのであるが、そのことにはどのような意味があるのだろうか。神功皇后を卑弥呼に充てているとすれば、それは事実ではなく、神功皇后の存在性が危ぶまれることになっていかざるを得ないのであるが、果たしてどのような事情があったのか。

それは、記紀の編纂上卑弥呼のことを記述せざるを得なかったのだが、卑弥呼を主役として記紀に登場させたくなかったということであろう。その理由は卑弥呼が純和系でなかったということになる。具体的に言ってしまうと、卑弥呼が琉球系だったからなのである。紐解けば、日本人は渡来系の人たちの混合であるので純和系と考えるのは難しいのであるが、少なくとも皇統譜にはっきりと琉球系と分かるようにはしなかったということなのだろう。卑弥呼が琉球系だったことについては後の項にて詳述の予定のためお待ちいただきたい。

次に、天照大神について検討してみたい。記紀においては、天照大神が卑弥呼に擬して記述されていることは多くの古代史家が指摘していることであり、それは概ね的を外していないのではないと思われる。問題は卑弥呼の出自である。この問題は漢籍からは答えが得られない。では、記紀の編者たちはどこから卑弥呼の情報を得たのであろうか。卑弥呼の活躍時代は記紀の編纂の概ね500年前くらいのことである。このくらい前のことであれば、しっかりと口伝が伝わっていたのではないかと考えられるのである。しかしながら、記紀においては卑弥呼の活躍をしっかりと内容で伝えていないのである。何故であろうか。それは、卑弥呼が琉球系であることをしっかりと把握していたからである。

念のため、天照大神が卑弥呼に擬して記述されている幾つかについて取り上げよう。まずは名前であるが、卑弥呼がどのように訓じられていたか今は分からないが(口伝でも不詳だったと考えられるが)“天照”としたのであるから“日または陽”で相当であろう。そして、続いて“巫女または御子”と読んだ。こうして、卑弥呼が「鬼道に事えて衆を惑わす」女王であったことを、高天原から地上界を差配する天照大神に擬して著した。

次に邪馬台国の女王卑弥呼は、乱れた倭国を治めるため倭国の女王に共立される。そして、その倭国とは『魏志倭人伝』の記述から九州島であったろう。天照大神はというと、新嘗祭を執り行っていたと記されるのでもはや皇祖神と言えるのであるが、孫

のニニギが地上界を治めるべく派遣されるのだが、その降臨した場所が「日向の襲の高千穂の峯」であったと記される。その地は直に南九州と解していいのだろう。そして三代により界限を纏める。そしてその後、後代が宇佐、遠賀を經由して大和へと東征し初代天皇に就任する流れとなっているのである。

また『魏志倭人伝』では、卑弥呼は「狗奴国の男王と素より和せず」と記述され、このことは大きく取り上げられているのだが、記紀においても天照大神とスサノオとの確執が神話のなかで重要な位置づけで語られるのである。この狗奴国は出雲国でなければ話が繋がらないのであるが、詳細は紙面の都合があり別稿に譲りたい。

以上のように、記紀ではその記述において卑弥呼を天照大神に擬して著し、しかも神話時代の物語にすることで、卑弥呼の存在をはぐらかしてしまった。その理由はいえ、上記のように卑弥呼の出自が琉球系であるからに他ならないのである。そして、天照大神はじめ天津神が住む「高天原」というところを創り出したのである。この「高天原」の所在地には「天上説」(神々が住まう所を天上界とした)、「地上説」(地上のどこかの故地を呼んだとする)、「作為説」(神代のことは後世の作為とする)などがある。これらの中では「地上説」が本質に迫っているように考えられるが、多くは地名からの類推であったり、記紀の記述をもとにしたものであったり…である。しかしながら、記紀の編者は卑弥呼の出自が簡単に推理されてはならないのである。本稿では、「地上説」を採るのだが具体的な場所ということではなく、「高天原」とは“古代琉球(或いは古代琉球の信仰)である”というふうに考えており、この考えをもとに次に進んでいきたい。

(2) 古代琉球の信仰とは

本稿では東南アジアの「ホアビニアン文化」の流れをくむ人たちが琉球経由で九州に進んできたことを論じてきた。そして、その人たちが喋っていた言語(琉球語)が日本語の形成に影響してきたことを論じてきた。この項では、更にその人たちが崇めていた信仰をも帯同してきたことを論じたいと考えている。

『魏志倭人伝』に次のような記述がある。“卑弥呼は鬼道に優れていた。卑弥呼には夫がいなかったが、男弟がいて、卑弥呼を助けて国を治めていた”。…と。これらのこのの意味するのは、卑弥呼は鬼道(呪術)に優れており国民の信頼を得ていた。そして、政治や軍事は弟が差配していたものと理解されるのである。

こうした卑弥呼の鬼道の原像は、琉球の「斎場 御嶽」を管掌する「聞得大君」に求められる。「聞得大君」は琉球の信仰において最高位の呼称であり、琉球国王に並び、琉球王国全土を霊的に守護するものとされていた。この「聞得大君」、国王の「をなり神」(妹が兄を守護する)と言われている。こうした琉球の信仰については、琉球王朝以前の村落時代(3世紀～12世紀)においても御嶽が信仰対象であり、この祭

祀を根神(姉妹)が司り、その信託によって根人(兄弟)が政治を行ったとされているのである。

インドネシアのライジュア島。魔女伝説など数々の数奇な風習が伝えられている。それらの一つに、姉妹がその兄弟を霊的に守護するという信仰があり、兄弟が危険な場所に旅立つ時にはその姉妹は弟の無事を祈って、自ら織った「イカット」という布を兄弟に贈るという。ライジュア島に代表されるこうした信仰に触れると、それが島伝いに琉球に伝播してきただろうことが良く理解されるのではないだろうか。そして、琉球において根付いたこの信仰が、人々の移動に伴って九州島に伝わってきたのだらうと考えられるのである。

この項ではもう一つ論じなければならないことがある。それは、琉球から伝わってきた信仰は卑弥呼だけに伝わったのかどうかという問題である。その答えは土蜘蛛にあると考えているので、次に土蜘蛛について話を進めさせていただく。

まずは Wikipedia に解説されている内容を紹介してみよう。(抜粋)

- ・土蜘蛛は上古の日本においてヤマト王権に恭順しない土豪たちを示す名称である。
- ・山野に岩窟、土窟などを築いて住み強暴である。
- ・「神武紀」では身短くして手足長く、侏儒に相似たりと形容される。
- ・瀧音能之は『肥前国風土記』の佐嘉郡の土蜘蛛が荒ぶる神を鎮めた例など、九州地方の土蜘蛛に巫や農耕的呪術の特徴が見られることから、これらの個人はシャーマニズムを権力の背景とした地域の首長だったと推論している。

『魏志倭人伝』に記述される「侏儒國」は小人の国である。人の^{たけ}長3、4尺で、女王国から4,000余里離れたところにあると記述される。沖縄諸島には現在でも明らかに小柄な人々が存在する。「侏儒國」は沖縄諸島のこととして概ね外していないものと思われる。先述のように「マニ族」の人たちは小柄であり、髪は縮れていて肌の色は濃いのだという。

瀧音能之氏(駒澤大学名誉教授)の推論の内容は、上記の参照だけでは土蜘蛛の出自について論じているかは分からないものの、土蜘蛛の概念については本稿に近い視点で推論されているものと思われる。

(記紀や風土記などに人名が挙げられている)土蜘蛛の分布領域は、常陸国7か所、豊後国6か所、肥前国12か所、陸奥国2か所、日向国1か所と九州・関東・東北と各地に点在している。その首長名と思われる名前が45あり、そのうち女性首長と思われる土蜘蛛が14名いる。(Wikipedia)

土蜘蛛は基本的にはヤマト王権に恭順しない土豪ということなので、上記の分布を同時期・並列的には評価できない。常陸国や陸奥国は覇権を拡大していった後の国々の土蜘蛛ということであろう。とすれば、ヤマト王権初期においては殆ど九州分布が中心ということになろう。そして、上記の土蜘蛛に関する Wikipedia の解説に

鑑みて、九州の土蜘蛛は琉球から伝播した人と文化であると思われるのである。それは、古代琉球遺跡に洞窟遺跡が多くみられることから確認されるだろう。

この土蜘蛛という名称、誰が命名したかは明らかではないのだが、記紀などがそのように記述した可能性が高い。蝦夷か熊襲とかよりも卑しんでいることが明らかである。人間ではなく昆虫に比喻しているからである。何故そこまで蔑まないとならなかったのであろうか。それは、瀧音氏が指摘されているように、“九州地方の土蜘蛛がシャーマニズムを権力の背景とした地域の首長だった”からであり、そして、本稿の主張するように、その呪術者である首長たちの一人が卑弥呼に繋がっていくからと考えられる。

更に、もう一つ論じておかなければならない問題がある。それは、人や文化が本稿とは逆に、九州から琉球に流れたのではないかという説に対してどのように考えるかという問題である。それは例えば、渡具知東原遺跡(沖縄県読谷村)から7000年前地層で「爪形文土器」が、また、5000年前の地層で「曾畑式土器」(熊本県宇土市曾畑貝塚由来)が発見されたことなどがあり、九州から琉球へ人と文化が流入したのではないかと考えることが主流になっているようである。

しかしながら、それらのことは既述のように物資の交易から行われたことであると考えたほうが良いのであろう。何故なら、琉球には水が少ないからである。列島本土や九州には大きな河川が各地に流れている。河川水害により何度も何度も住居などが流されたのであるが、それでも縄文人は水のある所に住みついてきたのであろう。そのように考えると水の少ない琉球に九州から人が移入するということが考えにくいのである。若し流入があったとしてもそれは限定的なことであったと考えたほうが合理的である。琉球に稲作が伝播するのが随分遅れたのもそのような事情からであったと考えられるのである。

(3)遠隔地からの統制～鬼道～

この項では、第2章にて保留にした卑弥呼が遠隔地にいて鬼道を用いてどのようにして衆を惑わすことができるのかという問題に答えることがテーマである。そこで、『魏志倭人伝』の関連箇所の記述を抜粋してテーマをもう少し具体化してみよう。

『魏志倭人伝』の記述。“其の国、本亦男子をもって王となす。往まること7～80年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王となす。名を卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年すでに長大なるも夫壻なし。男弟ありて、佐けて国を治む”。

以上を簡略に解説すると以下のとおりである。

① 其の国(倭国)はもともと男子が王であった。

倭国には朝鮮海峡から北部九州の幾つかの国があった。そして、それらの国々は男王が治めていた。

- ② 倭国が乱れ、歴年(何年か)相攻伐する事態になった。
何らかの理由で倭国は争乱状態になった。そして、お互いに攻め合う状態が何年か続いた。ここで問題となるのは争乱状態になってしまった理由である。
- ③ 鬼道により(倭国の)国民をひきつける卑弥呼という女王を共立した。
争乱を収めるために倭国の女王として卑弥呼を共立した。(もちろん、争乱は収束したのである。)ここで問題になるのが、卑弥呼の都する邪馬台国の場所である。九州に在るとしても船で何日か行って、歩いて何日か行かなくてはならない。そのような遠隔地に卑弥呼がいて、どのようにして“衆を惑わす”ことができるのかという問題である。
- ④ 卑弥呼には弟がいて、卑弥呼を支えて国を治めた。
邪馬台国には卑弥呼の弟がいて、卑弥呼を支えて国を治めていた。倭国を治めたのもこの体制と考えるのが妥当であろう。

さて、②の倭国が争乱状態になってしまった理由であるが、従来論じられているような各国の領有地の拡大争いというようなことではないものと考えた方がよいものと思われるのである。それだと、やがて強い国に収斂していくはずであるし、これを鬼道で収めることはできないだろう。では、その理由とは何であったのか。可能性が考えられるのには二つある。

一つは自然災害による飢饉発生による争乱である。自然災害の再発のなきよう祈りに託したり、今年の占いを行うというようなことはありうるだろう。しかしながら、起きてしまっている飢饉と争乱を祈りに託して収束できうるのか疑問がある。また、卑弥呼一人で各国の祈りを賄えるのかという疑問もある。

もう一つが大陸からの渡来人に帯同してもたらされた疫病の発生による争乱である。これに対しては発生なきよう祈りに託すことが大いに考えられる。そしてまた、大陸からの渡来グループより伝授された鬼道(罹患者を隔離する術・辰砂を薬剤として用いる術など)により、疫病の拡散を防ぐと共に疫病の収束に寄与できたのではないかと考えられるのである。

ここで先ず考えなくてはならないのは、卑弥呼の鬼道の能力が多く他国の男王たちに知られていたのは何故かということである。多くの民が疫病の蔓延から救われたのを男王たちが見聞したということの可能性が高いのである。自国(邪馬台国)のみならず、近隣の投馬国などの民を疫病から救ったことが九州地区各国に広く知られるようになったということだろう。そして、肝心なのはどうも卑弥呼は自分で動いたのではなかったと考えられるのである。それは『魏志倭人伝』に、“王になりてより以来、見る者少なし”と記述されるからである。

では、どのようにして各国の疫病を収束させていったのか。その方法は、配下にある鬼道に熟達した弟子たち(これを宗女と称した)を各国に派遣することによってであったものと考えられる。そして、この宗女たちが各国にそのまま留まり、各国の「根神」として機能したのではないかと考えるのである。

ここまで記述してくると、ほぼ本項のテーマに答えているとして良いのだろう。即ち、

卑弥呼が遠隔地にいて鬼道を用いてどのようにして衆を惑わすことができたのかといえば、それは各国に配した宗女に行わせしめたということなのである。

宗女たちは自立的に鬼道を用いるに叶うレベルにあった者が指名されたのであろうが、なお、場合によっては卑弥呼の辞を伝えるということがあった模様である。『魏志倭人伝』には、“ただ男子一人ありて、飲食を給し、辞を伝え居るところに出入りす”と記述される。

この項の終わりに、卑弥呼に鬼道を伝授した大陸からの渡来グループとは何者かということに触れておこう。そのことについては、本欄の小稿『徐福渡来はやはり真実だった』、『徐福渡来はやはり真実だった2』にて詳論しているのでご参照いただきたい。

(4) 遠隔地からの統制～一大率～

この項でも第2章にて保留にした、伊都国に設置されたと記述される一大率のことについて検討してみたい。具体的には、一大率は誰から任命されたのか、一大率という役職の職務内容は何か、邪馬台国(卑弥呼が都するところ)から遠隔地にあってどのように統制が行われたのかというようなことがテーマとなろう。

因みに、『魏志倭人伝』の記述は以下である。“女王国の以北には、特に一大率を置きて、諸国を檢察せしむ。(諸国)これを畏憚す。常に伊都国に治す。国中に刺史の如きあり。…”

先ず、一大率は誰から任命されたのかということについて検討してみたい。これについては、イ) 帯方郡(魏)の派遣説、ロ) 帯方郡(公孫氏)派遣説、ハ) 邪馬台国(卑弥呼)派遣説などがある。一つずつ見ていくこととしよう。

イ) 帯方郡(魏)の派遣説…この説は読んで字のごとく、一大率を(魏の)帯方郡からの派遣とするものである。漢風名が使われていることには優位性が認められる。しかしながら、卑弥呼が共立された時期(190年前後か)から魏に朝貢するまで(238年)時間が空いてしまうことが気がかりである。また、(自分たちが派遣したのに)一大率の職務内容が認識されていないことに疑念が残る。

ロ) 帯方郡(公孫氏)派遣説…この説は一大率を(公孫氏時代の)帯方郡からの派遣とみる説である。名称からもとめて一大国に設置されていたものが公孫氏滅亡後(邪馬台国に恭順して)伊都国に移設されたとする。或いは、一大率が一大国に在り、その出先機関が伊都国に在り、公孫氏滅亡後名称が継承されたと考えることも可能である。しかしながら、滅亡した公孫氏の資料などが魏に伝わったとすればそうした一大率のことが何らかの形で『魏志倭人伝』に記述されそうである。

ハ) 邪馬台国(卑弥呼)派遣説…これには邪馬台国畿内説と九州説があるが、本稿では九州説で進めていきたい。即ち、一大率は南九州に在った邪馬台国の卑弥呼が倭国の大乱を収束させ、女王に共立された時に派遣されたとする。その場合、漢風名が命名されたことに疑念を残すが、帯方郡(公孫氏)の官の指導を得たも

のと考えれば良いのだろう。魏の官が一大率の職務内容を認識していないことは「むべなるかな」である。

次に、一大率という役職の職務内容について検討してみよう。一大率は中国の刺史のような役目だったというから、卑弥呼を共立した各国の長官のような位置づけであった。各国には王がいなくて官・副官以下が配置されていたので、整合性がとれる。また、諸国を検察しており、更に諸国これを畏憚っていたというから、警察・軍事などを司っていたものと考えられる。

『魏志倭人伝』の記述では、倭国からの朝貢団や帯方郡の使者を港に出向いて搜索した。送った文書やもらった贈り物などは女王のもとに運ばせ不足や食い違いのないようにしたといった事務的な役目も負っていたようである。

このような多岐にわたる職務を長官一人で賄えるはずがなく、長官をトップとした大きな組織が形成されていたものと考えられる。特に、警察力・軍事力は強力な体制をとり、定期的な巡回を行うことによって諸国を統制していたものと考えられる。

さて、この一大率は女王に共立された時に卑弥呼が派遣したのであるが、先述のように名称は公孫氏の指導を受けたのだった。とすれば、職務体制についても同様に公孫氏の指導を受けたものとするのが自然であろう。問題は誰を長官として派遣したかである。

それは、卑弥呼の男弟と考えるのが相当であろう。『魏志倭人伝』では、“男弟ありて、佐けて国を治す。”と記述される。また、邪馬台国の記述では官の記述があるだけで男弟の記述がないのであるから、男弟は(女王共立後の)邪馬台国では役目を負っていなかった。伊都国にあって一大率を差配するという重大な役目に就いたので、邪馬台国一国だけを治めるという立場ではなくなっていたのである。

本稿の終わりに、記紀の編者たちが琉球を蔑んだ理由について述べてみたい。考えてみれば、土蜘蛛と呼んだ琉球の人たちから卑弥呼が現れて、卑弥呼を天照大神に擬したのであるならば、皇祖神を土蜘蛛と称してしまっていることにもなりかねない。それでも土蜘蛛と呼んだ。その本当のところは徐福の伝えた鬼道にあるのではなかろうか。中国に対して遅れをみせてはならないために編纂した記紀であったから、徐福の伝えた鬼道によって皇統譜が形成されたなどをもっての外ということだったのであろう。このように考えると、徐福渡来の痕跡が消された理由も理解できるのであり、逆に言えば徐福渡来がやはり真実だったということになるのである。